

空が落ちてくる。僕たちの住んでいる大都會の空が落ちてきて、空に蔓延っていた城が、その土台となっていた雲と共に落ちてくる。僕はそれを支えなくちゃと思つて、世界中から集めた木材を継ぎ接ぎして、人間の世界を守らなくちゃつて、空の城に住む神たちの力に少しでも対抗しようと思つて、人間だつて生きていいじゃないかつて言いたくて、泣きじゃくりながら街を覆つた。

僕の街には木材に特殊な塗り物をして硬度が遙かに増した盾が設置されたけれど、それを行つたのが僕だつてことを覚えてる人なんているのだろうか。みんな享樂に生きている。僕の功績が顧みられることは無い。悲しみが襲つてきて、僕は突つ伏して呻く。誰も僕を見ない、誰も僕に気づかない、誰も僕に手を差し伸べない、僕は孤独で、味方はいない。母親は、僕を車で遠くに運んで置き去りにした。僕の居ていい場所つて何処だろう。何処かに僕が居ても疎んじられない場があるのだろうか。凍えてくる。寒い冬の雪が積もつた道の上に堆く埋もれた高さ何メートルもの氷雪に身を打ち据えて、僕は死んだのかと思つたけれど、それ以前に、体のあちこちが折れたような、破裂したような、激烈な痛みで気が遠くなる。災害に遭遇したような、そんな気分だつた。僕は空を見上げると、痛みが起こつた。僕の体の何処かが引きちぎれたようだつた。苦悶の表情を浮かべると、クラスメイトの何人かが僕を取り囲み、念仏を唱え出した。僕の体による無への結合。一人の人間に分裂した魂である僕が、大いなる御魂に還るのだろうか。わからない。何もわからないながら、僕は捨てられた場所から人里の明かりを求めて山を降りていった。グイグイ、ドキドキ、降りるんだ。ケラケラ、ペリペリ、落ちるんだ。僕は一番下まで叩きつけられて、氷と、鉄と、灼熱の炎に身を焼かれた。ここは何処なんだ？　ここは地獄だ。

地獄に着いた気分で浮かれて閻魔とダンス、灼熱の血の池で背泳ぎ、針山で足つぽマッサージ。レジヤ、それがこの地獄に相応しいラベル。それら全てを投げ捨てて、地獄の鬼を罰して潰して、刑罰地獄變の亡者、皆が皆を殺し尽くす蠱毒のような悪しき世界。それが僕らに科せられた罪業なのだと言われてしまつても、僕には僕の咎を感じる力が無いみたいで、一向に、さっぱり何も分らない。天狗が空から駆け下りて来てくれたことがあつたっけ。植物の実が転がってきて食べさせてくれたこともあつたっけ。僕の心の深奥は、体より大きい釘を打たれたようで、早速の自分の運命の転換に驚愕してしまい、また改めて崖から落ちる動機になつたりもした。怪我を負わない自分でありたかつた。潰れた人体なんて何も面白いことがない。水中に没してしまえば良かつたな。巧言令色少し仁。もう少し本心から生きても良かつた。下へ、上へ、斜め上、斜め下、部屋中に叩きつけられて、僕は死んだ。遺骸に油を撒かれ、火をつけられて焼かれた。燃える体から僕の意識は

結晶になって輝いて飛び上がり、太陽よりも輝いて、悪しきものだけを爆発させた。悪しきものの居ない世界は、清潔で、優しく、清らかで、脆かった。過酷な自然に負けた善良な人々が滅んでいくのを意識だけで感じながら、僕は生まれてから始めての成仏を迎えた。

幽霊となって初めての春。僕は空を飛びながらふわふわと望んだよ。もにものにサラダに。天狗刃の覆面つけて、口は出てるからいっぱい食べた。幽霊は霞を食べて生きているのだ。だから存外、楽しかったんだ。雑多な意識の断片に埋め尽くされた僕は、神の気まぐれで生き返された。今度こそ、好き放題に落下できる人生を目指すぞ。神様ありがとう！ 感謝！ 終！